



関東甲信越土を考える会の総会の様子

土を考える会

各地区で総会開かれる

各地区で総会を開催

全国土を考える会のうち、北海道を除く各地区の土を考える会が2月から3月にかけて地区総会を開催した。いずれの地区でも昨年は夏期研修会の開催を見送らざるを得なかったため、地区の活動を中心に参加してきた会員にとっては、ほぼ1年振りに顔を合わせる場となった。

議題は、昨年12月に開催された全国土を考える会総会で決議された内容の報告と、会計報告と予算案、そして今後の活動についての審議である。会長の開会の挨拶に始まり、役員から全国事業を一旦とりやめて各地区を中心に活動していく方針と、当面は(株)農業技術通信社に全国事務局を置くこと、各地区の活動は役員を中心に会員が主体的に進めていく旨が説明され、質疑応答の場が設けられた。

さらに、会員の関心事であるスガノ農機(株)の動向については、全地区の総会に渡邊信夫社長が出席して、昨年の騒動について事実経過を説明した。そのうえで、会員に対して迷惑をかけた旨を謝罪し、会から要請があればできることは協力させてほしいと述べた。

土を考える会は発足時から、スガノ農機が主に担当していた事務局と

二人三脚で活動してきただけに、会員と営業マンとのつながりは深く、会員らのスガノ農機の新体制に対する期待の声は大きい。しかしながら、近年は騒動の以前にも、事務局の意向が強く反映されることに不満が生じていたのも事実だ。その一方で、スガノ製品のユーザーも多く、信頼関係を元どおりに修復したいという思いは誰しもが抱いているものの、昨年、事態の収拾に奔走した役員の間々にしてみれば、即座にスガノ農機とタイアップできないという思いも見え隠れする。そうした温度差は各地区の総会で一様に感じられたものであった。

また、これまでの経緯には理解が得られたものの、今後の活動については試行錯誤の部分が多く残されている。役員にリーダーシップが求められるもの、会場の手配から案内の送付、配布資料の準備などに奔走した彼らからは、これまでスガノ農機が事務局として協力してくれたことへの感謝とその甚大さを痛感するという声も聞かされた。事業拡大を積極的に手がけ、一國一城の主として奮闘している農業経営者にとって、本業以外で事務作業や会の段取りに時間を割くのは容易なことではないからだ。このままでは役員を引き受けてもらえなくなると

いう危機感もあり、これまでどおりのスムーズな運営に向けて、解決が急がれている。

課題は山積しているものの、土を考える会とは何かを問い直すきっかけを得たともいえる。当たり前のよう存在していた集まりがなくなつたことで気づいたこともあるだろう。共に活動してきた仲間とともに再出発し、会の発展を目指してどんな活動を展開していくのか。今後の動向から目が離せない。

なお、開催日時と開催場所は次のとおり。

- 関東甲信越土を考える会
(黒川義治会長)
2月18日 群馬県渋川市
 - 北陸東海近畿土を考える会
(前田喜芳会長)
3月6日 富山県黒部市
 - 中国四国土を考える会
(藪内孝博会長)
3月15～16日 岡山県岡山市
 - 九州沖縄土を考える会
(手島健次郎会長)
3月18日 熊本県阿蘇市
- ※参加人数が少なく、秋に再び開催する予定
- 東北土を考える会
(永浦清太郎会長)
3月19日 岩手県花巻市



1 土壌断面の情報を記録し、ライブ解説する大倉利明氏 2 モノリス（土壌断面標本）の採取作業 3 今回採取したモノリス。まさに「採ったど〜」という瞬間 4 中国四国土を考える会の研修会で圃場に掘った穴を取り囲む参加者ら 5 昨年採取したモノリスと、土壌断面をスライスしたプレバート

唯一開催された研修会 テーマは「土中環境は、 モノリスで見て知る。」

今回の総会と合わせて研修会を企画したのは、唯一、中国四国土を考える会である。昨年の騒動が起きる間際に行なった研修会と同じテーマだが、圃場に穴を掘り、土を実際に眺めて考えてみようというコンセプトだ。中国四国地区の農業経営者をはじめ30名余りが参集した。

1日目は、農研機構・農業環境変動研究センターの大倉利明氏を講師に招き、モノリスの採取と土壌断面記載の実演を行なった。圃場を提供したのは副会長の奥山孝明氏。ユニポで圃場に1m四方、深さ1mまで穴を掘り、大倉氏がその解釈を説明するスタイルだ。参加者らはその穴を取り囲み、大倉氏のライブ解説に興味深く聞き入った。

モノリスとは土壌断面標本のことで、土の館（北海道土富良野町）に展示されているものと聞けばピンとくる人もいるだろう。特殊な樹脂を流し込んで土壌断面を現場に合った状態のまま、剥ぎ取ったものを十分に乾燥させて、木枠に固定して貼り付けたものだ。

皆さんも土壌図を開いて、圃場の土質を調べた経験があると思うが、

実際に掘ってみるとその分類と一致しないことはよくあるようだ。農地の場合は、基盤整備等で圃場を造成した際に切土や盛土をしているからだ。作土層は資材の投入や作物の生育、耕うん方法によっても長い時間をかけて変化する。そうした状況が土壌断面に表れてくるという。

今回は100mほど離れた2つの圃場に穴を掘り、それぞれモノリスを採取した。いずれも灰色低地土だが、水田土壌にしてはグライ反応が見られなかった。赤く見える鉄の表れ方から、河川の氾濫等で水が浸水したり引いたりする速さを予測したり、マンガンや硫黄が染み出してくる理由を探ったり、土壌がどのように生成したのかを知ることが目的である。研究者にとっては、土壌図を更新する材料となり、農業者にとっては、耕うん方法や水の動かし方を考えるヒントになり得る。

2日目は総会を開催した後、農研機構・農業環境変動センターの岩崎巨典氏から「日本土壌インベントリ」と「e-土壌図Ⅱ」の利用方法についての説明を受けた。スマートフォン用のアプリも用意されていて、日本に分布する土壌の種類を調べることも可能だ。さらに大倉氏から土壌分類の講義を受け、まさに土を考える研修会となった。（加藤祐子）